

6. 「歴史総合」の教科書をよむ(2)―同時代の比較史

2025.11.14. 大橋 幸泰

はじめに

「歴史総合」の教科書／日本史と外国史を分断しない近現代史(実際には近世の途中以降)

→求められる視角／a.同時代の横のつながり(前回)、b.同時代の比較史(今回)

*本日の課題／同時代の諸地域を比較すると、どのような歴史像が構築できるか

1. 国民国家の成立

【注目史料】

・明治時代の小学校の授業風景 pp.88 /江戸時代の寺子屋の様子 pp.39

→個別学習方式(近世)から一斉授業方式(近代)へ

*教育方法の転換は何を意味しているか？

19C(-20C)に成立した国民国家／成員が均質で、国民としての一体感を持つ国家

*その成立要件／a. 明確な国境、b. 国家としての主権、c. 国民的帰属意識(ナショナルアイデンティティー)

→言語・宗教など、同一の文化を共有する国民 pp.69 /しかし、実際にはフィクション

*国境で囲まれた地域には多様な文化が存在／マイノリティは抑圧されるとともに、新しい「伝統」が創出／加えて、既存身分は解消されるが、実際には尊卑上下の格差が存在／近代秩序に適合的な身分が成立

→現実の多様性を見えにくくするという矛盾を抱えながら、近代において世界各地で国民国家が存立

*国民国家の形成／二つのルート

a. 被治者の側からのボトムアップ／既存身分やその特権の解体など

b. 治者の側からのトップダウン／社会保障・教育・軍隊の整備など

→概ね、イギリス・フランスではボトムアップにより pp.46-47/52-55/68、イタリア・ドイツ・日本ではトップダウンにより pp.62-63/86-91、アメリカはボトムアップ後トップダウンにより pp.50-51/66-67、それぞれ国民国家が成立したとの印象

*しかし、どの地域でも早い遅いはあるが、両者の動向が存在／日本でも、18C 頃からボトムアップの動向は存在／商品経済の展開 pp.37 による豪農の登場、横並び意識の醸成など／これに明治政府によるトップダウンの動向が加わって、国民意識とナショナリズムの確立へ pp.88

2. デモクラシーの内実

【注目史料】

・吉野作造の民本主義論 pp.134

→デモクラシーの訳語としての民本主義／人民が主権を持つ民主主義とは異なる

*近代日本のデモクラシーはどのような内実を持ち、それはヨーロッパとはどのように異なるのか？

19C 後、デモクラシーの精神が近代日本へ流入／啓蒙思想家による文明化の促進

*民衆が主体的に国家を支える精神を保持することが不可欠／たとえば、福沢諭吉『学問のすすめ』

→次いで、自由民権運動により民衆全体に国民意識が広がるとともに、近世の豪農を前身とする名望家(ブルジョア)の登場／それを代表者とする代議制の確立 pp.90-91

→日本へのデモクラシーの定着はヨーロッパにおけるそれと同じではない

a. フランスの場合／絶対王政に対する民衆の不満を原動力に、フランス革命(1789)／国民議会の結成、人権宣言の発出、憲法の制定など、国王の権限を剥奪／王政から共和政へ pp.52-57

* 革命派・反革命派の対立や主導権争いなどによる大量の犠牲者と引き替えに、国民主権国家が成立

- b.日本の場合／仁政を媒介とした領主・領民の双務関係の崩壊を背景に、「世直し」を求める気風 19C 中／幕府に代わって成立した明治政府により諸改革の断交(明治維新)／天皇の位置づけの転回 pp81・91
- * 近世の仁政的政治常識の消滅をともないつつ、デモクラシーの精神が流入／その先に、「一君万民」の天皇主権国家が成立**

→ただし、いずれも男性(フランスの場合は白人の男性、日本の場合は本土の男性)優位で進行／女性には、男性とは別の役割(日本では「良妻賢母」)が付与／性別役割分業の固定化 pp.89

根底にある文明的精神の伝統

- a.ヨーロッパ的古典古代(ギリシア・ローマ)の民主政
- b.東アジア的古典古代(中国)の民本徳治／民本主義とは、仁政論の近代版

3. 戦争の記憶

【注目史料】

- ・忠魂碑(日本)と第一次大戦戦死者慰霊碑(フランス)pp.155
- 国家の戦争で命を落とした国民を慰霊
- *近代における戦争慰霊碑は、だれがどのような目的で建立したのか？

近代の戦争慰霊碑／国民国家の形成・成立と同時期

- *国民としてのまとまりを形成するために、戦争は格好のイベント／ナショナリズムの高揚へ
- 政治家や地域の有力者が主導して、戦争慰霊碑を建立／戦死者の家族は、肉親の死が無駄でなかったと納得するとともに、国家のために命も厭わない忠君愛国の国民育成を鼓舞／こぼれ落ちる者を排除
- *靖国神社も同じ／戊辰戦争の官軍戦死者を慰霊するために設立された東京招魂社が前身
- 近代の戦争慰霊碑は国民国家の文脈で理解するべき／「負の遺産」の価値 pp.155
- 前近代の戦争慰霊碑、あるいは、現代の戦争遺産はどうか？

4. 史学史的背景

1990代、国民国家論の登場

- *自明だと考えられていたことが自明でないことの自覚化を促進／たとえば、ナショナリズム、ジェンダー
- 近現代の常識≠前近代の常識／現在の常識が未来の常識だとは限らない／現代の生きづらいつら状態を克服できる可能性

おわりに

マイノリティという存在／どの地域の国民国家の形成過程においても生み出される

- *マジョリティによるマイノリティへの抑圧やマイノリティの同化をともないながら国民国家が成り立つ
- 国民国家は内側にも外側にも差別対象を創出／ただし、国民国家成立以前の前近代にもマイノリティとそれに対する差別は存在
- *それぞれの時代・地域の文脈で格差や身分を位置づける必要／超歴史的に続いているように見えるものも、すべて同じ性質のものとするべきではない／歴史学は時系列的に変化を考える学問

【参考文献】

- 歴史学研究会編『国民国家を問う』(青木書店、1994年)
- ベネディクト・アンダーソン(白石さや・白石隆訳)『増補 想像の共同体』(NTT出版、1997年)
- 鹿野政直『化生する歴史学—自明性の解体の中で』(校倉書房、1998年)
- 谷川稔『国民国家とナショナリズム』(山川出版社、1999年)
- 中山大将『歴史総合パートナーズ 10 国境は誰のためにある?』(清水書院、2019年)

【付記】

- ・明日までに、Waseda Moodle にて講義記録の提出を求める。